
砂国

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂国

【Nコード】

N2318T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

砂漠広がる地域で出会った、盗賊と少女。それぞれに追い求めるものを彼らは持つ。彼らは、運命の渦の中に生きていく。

一部暴力的な表現を含んでおります。
友人と、共同で作っている作品です。私が男性視点を担当しております。
友人と、共同で作っている作品です。私が男性視点を担当しております。

女性視点は友人担当です。ご覧になりたい方は、私のサイトまで。

http://kara00.moo.jp/sakoku.html

サイト、dノベ転載

世の中ってのは皮肉なぐらいに運命ってやつに縛られているんだと思う。

俺がその集落に行ったのも全くの偶然だった。

いつものように集落を見つけて、食料などを頂戴するつもりだった。

この砂漠で生きている者はいつだって食うか食われるか。取るか取られるか。

それがこの砂漠の掟だ。強い者が勝つ。

だから俺は当たり前のようにそれを行うんだ。取られるヤツが悪い。

そして、そんな時に俺は見てしまった。

集落に入り、中程に達したぐらい。

氣勢のいい、まだどこか幼さが残る女の声でした。

「返せ！ それはあたしらが苦労して調達してきた食糧なんだ！」

普段なら聞こえない声なのに、この時間こえたのも、運命の悪戯ってやつなのか。

俺は気になって声の聞こえた方を向いた。

！！

驚く以外になかった。

だってそこにいたのは、俺が欲して止まないアイツに似た女がいたんだから。

これはもう　　さらうしかないだろう。

なぜ、とかいうことは俺の頭にはなかった。

ただ目の前の少女と言えるぐらいの女を欲し、ラクダを走らせて向かっていた。

他には何も頭になかった。

女に近づいて、背中 of 服をつまんでラクダに乗せた。

そして俺はさっさとその場から立ち去り、巢に戻ることにした。

あとは仲間達がなんとかやってくれる。できのいいヤツらだから女がなんだか暴れているようだったが、全く気にならないほど頭は真っ白だった。

俺の周りは、ただ風の音と太陽の刺す光だけだった。

巢に戻った俺は途方にくれた。

捕まえたのはいいが、当然女は警戒心、むしろ敵対心をこめてこちらを睨んでくる。

考えればわかることなのに、数分前の俺はどうしようとしてたのか。

ぜひとも聞きたいものだ。

とりあえず、暴れられては困るので縄で縛っておいた。

そんなところで、たくさんのラクダの足音が外に聞こえた。仲間が戻ってきたようだ。

「頭ー！　一人だけ先に戻るなんてどうしたんすか？　びっくりしましたよー」

女の家から物を奪っていたやつだ。

その他にもラクダの足音や声が聞こえるから、皆戻ってきたのだろう。

「ああ悪いな。だけど、俺だってちゃんと物はもらってきたぞ」

俺は懐に隠してあった袋を出し、中身を一つ取ると、そいつに向けて放り投げた。

中には果物が入っている。

俺は林檎を手に取り、かじった。ここら辺では、珍しい果物だ。みずみずしさが心地よく喉に染みた。

「ジール、気紛れもいい加減にしといてくださいよ」「ケイル」

さっきの奴の後ろから来たのは、俺の片腕でもあるケイルだ。黒い髪に黒い瞳。ここら辺ではなんら珍しくはない髪の色と目の色。

だが、こいつが俺達の中でなんとなくういてるのは、盗賊には似合わない優しい顔つきである。

だいたい奴らはこれに騙される。

「ああ、わかってる。つい体が動いちゃうんだよな」

俺のその言葉に、ケイルは、しょうがないな、というように軽く口の端をつりあげて息をついた。しかし、俺がさらってきた女を見ると、その顔からは柔らかさは消え、強ばる。

すぐにまた笑みを作るが、張りついたようなそれは、寒々しく不自然なものだった。

そして、氷のような視線を俺に向けて重く呟くように言った。

だが、俺には確かにその言葉は届いた。

「本当に、あなたは懲りない人ですね」

俺は、その視線を受け、ただ軽く笑みを作り虚栄を張ることで一杯だった。

こいつだけは、俺の過去を知る唯一の人物だ。

生きていく術を教えたのは俺だが、その俺でさえ、こいつにはいつ寝首をかけられるかわかったものじゃない。

ケイルは頭がいい。だからこいつはこの砂漠で生き残っているんだ。

頼りになるが、油断ならない男だ。

俺達は、常に危ういバランスの元に生きている。

巢に戻った俺は途方にくれた。

捕まえたのはいいが、当然女は警戒心、むしろ敵対心をこめてこちらを睨んでくる。

考えればわかることなのに、数分前の俺はどうしようとしてたのか。

ぜひとも聞きたいものだ。

とりあえず、暴れられては困るので縄で縛っておいた。

そんなところで、たくさんのラクダの足音が外に聞こえた。仲間が戻ってきたようだ。

「頭ー！ 一人だけ先に戻るなんてどうしたんすか？ びっくりしましたよー」

女の家から物を奪っていたやつだ。

その他にもラクダの足音や声が聞こえるから、皆戻ってきたのだろっ。

「ああ悪いな。だけど、俺だってちゃんと物はもらってきたぞ」

俺は懐に隠してあった袋を出し、中身を一つ取ると、そいつに向けて放り投げた。

中には果物が入っている。

俺は林檎を手に取り、かじった。ここら辺では、珍しい果物だ。みずみずしさが心地よく喉に染みた。

「ジール、気紛れもいい加減にしといてくださいよ」
「ケイル」

さっきの奴の後ろから来たのは、俺の片腕でもあるケイルだ。
黒い髪に黒い瞳。こちら辺ではなんら珍しくはない髪の色と目の色。

だが、こいつが俺達の中でなんとなくういてるのは、盗賊には似合わない優しげな顔つきである。
だいたい奴らはこれに騙される。

「ああ、わかってる。つい体が動いちゃうんだよな」
俺のその言葉に、ケイルは、しょうがないな、というように軽く口の端をつりあげて息をついた。しかし、俺がさらってきた女を見ると、その顔からは柔らかさは消え、強ばる。
すぐにまた笑みを作るが、張りついたようなそれは、寒々しく不自然なものだった。

そして、氷のような視線を俺に向けて重く呟くように言った。
だが、俺には確かにその言葉は届いた。

「本当に、あなたは懲りない人ですね」

俺は、その視線を受け、ただ軽く笑みを作り虚栄を張ることで精一杯だった。

こいつだけは、俺の過去を知る唯一の人物だ。
生きていく術を教えたのは俺だが、その俺でさえ、こいつにはいつ寝首をかかれるかわかったものじゃない。

ケイルは頭がいい。だからこいつはこの砂漠で生き残っているんだ。

頼りになるが、油断ならない男だ。

俺達は、常に危ういバランスの元に生きている。

有能な仲間の後片付けは任せて、俺は残った。
とりあえず俺は連れてきた女をどうにかしなければならぬ。
まずは……

「……名前は？」

定番だが、一番無難だし、重要な情報だ。

名前があれば自然と気持ちの入り具合も違う。

女は突然で驚いたのか、傍から見てもわかるぐらい震えて、こちらに視線を向けた。

ちょうど視線が合う。

見れば見るほどアイツに似ていた。

だが、俺はそんな感傷にひたる前に気づいたことがあった。

「ああ、それじゃあ喋れねえやな。ちよっと待ってる」

俺は猿轡を外した。

縄は、いくら女とはいえ暴れられては面倒なので、そのままにした。

こんな状態では、交流をはかろうとすること自体無理な話だ。

むしろ間抜けだ。

女は、少しでも解放され、楽になったようだ。

相も変わらず俺を睨みつけ、決して屈伏しないという意志を、その周りにある空気にまで浸透させていた。

その意志の強い目もアイツと一緒にだ。

さあ、その声はどうなんだ？

「あたしを、どうする気なの？」

予想どおり、アイツとまったく同じ声だ。

ただ、年が幼いせいだろう。

アイツよりはまだ子供らしいやや高い声をしている。

もう少しその声を聞いてみたい。

その声で、俺に名前を聞かせてみる。

「俺はお前の名前を訊いている」

お前をどうするかなんて、俺だってわからない。

今、それを決めるためにお前と話してるんだ。

俺のその言葉に、女は少し憎々しげに顔を歪めた。

そういう気の強いところは似てないな。

アイツはもつと優しくだった。

あまり気持ちを顔に表さず、いつも笑っていた。

自然、アイツの影を探している自分に、嘲りの気持ちちがのぼり、

苦い笑いが顔にうかんだ。

「……………ミリアム」

女はそう言った。いかにも渋々という感じに。

ミリアム……………名前までアイツに似てるとは。

愛しい名に似ているその響きに、俺は自然と笑みがこぼれた。

女の名をもつ一度噛み締めた。

アイツの名前はミリアだった。

それは、彼女達が信じていた水の神の名をもじったものだった。

この女　ミリアムの名は一体どういう意味なのか。

「ミリアム、か。悪くない名前だ。少なくともジールよりはずっといい」

ああ、少なくともジールって名よりは。

俺のこの名前は、ある意味親からの呪いでもある。

ジールとは、俺のいた国の茨の一種の名だ。

それこそ茨のように、からみつく呪いが、今現在も俺を侵している。

俺には二重の呪いがかけられている。

……だめだ、この女と話しても俺の嫌な過去を思い出すだけだ。なんだって俺はこの女をさらってきたんだろうか。

仲間が戻ってくるまで、俺は何も言えずにそのまま黙っているしかなかった。

仲間が戻ってきた時には、外も暗くなっていた。

夜の砂漠を動くことは危険だ。

よぼとこのことがない限り、全てのものがするのと同じように俺達は眠る。

「ほら、お前はこれでもかぶってる」

俺は、自分の毛布を女にやった。当然の責任だ。

この女を守るために、他のヤツの毛布を奪うことはできない。

女はやはり驚いたのか、目を大きくして俺を見た。

だが、その反応からすると嫌がっているようではない。

それならそれでいい。

とりあえず女が温かく眠られればそれでいい。

俺は、余ってる薄い毛布でももらって寝ることにしよう。

できるだけあの女から離れて、あまり刺激しない方がいいだろう。

俺達は、そうして眠りについた　はずだった。

俺は夢と現の狭間で、不穏な気配を感じ取り、目が覚めた。

「ケイル！」

俺の怒気を含んだ声に、ケイルは動きを止めた。

ミリアムも俺のその声に目を覚ましたようだ。

奴は、ミリアムにナイフを突き立てようとしていたところだった。

俺は体を起き上がらせ、ケイルにゆっくりと近づいた。

ケイルは、俺の動作に合わせるように、ゆっくりとこちらを振り返った。

「どういっつもりだ、ケイル」

自分でも驚くぐらい、俺の声は冷たく響いた。

しかしケイルは、負けじと目線を俺に合わせるように立ち上がり、その目で鋭く俺を射抜く。

「その台詞、そっくりあんたに返すよ」

その口調は、以前の小生意気な子供だったケイルと同じだった。

懐かしさに俺は思わず口の端をあげた。

懐古、悲哀、自嘲など様々な思いが込み上げてきた。

ケイルは俺のその表情をどう解釈したのか、苛立ちを含めた声で

言う。

「あんだこそ、どういづつもりなんだ。姉さんに似てる女なんかさらってきて。

またこの女も姉さんと同じように、あんだの道連れにするつもりなのか」

「……ケイル、お前は頭がいいからわかっていると思ったが、勘違いをしている。

ミリアは道連れなんかじゃない。

彼女と俺は絶対的な運命に支配された共同体なんだよ。

この女　ミリアムは………アイツの生まれ変わりだ。間違いない。

俺達は永遠に世界を巡り、出会う運命を課せられている。

だから、その女を殺したって無駄なんだ。

お前の大好きな姉さんの魂は、余計苦しむだけだ」

ケイルは、淡々と語る俺の態度を余裕があるとても見ているのだろうか。

歯を噛み締めて、悔しそうな顔で俺を睨んでいた。

そんなことわかっている、と俺はその目からケイルの言葉を読んだ。

ああ、そうだよな、お前は賢いから、そんなことぐらいわかっているんだ。

「……止められなかったただけだろ。」

……ただ、お前がミリアムを殺そうとするなら、俺はお前を殺すケイルは俺の目をまっすぐにとらえた。

お前も随分とたくましくなったもんだ。

「そんなこと、最初からわかりきってたことだよ。」

あんだの腰にさげてるヤツは飾りじゃないんだって」

俺達は、お互いに笑みを浮かべて、それぞれの獲物を構えた。

どちらも、異常な興奮状態だったに違いない。

「待ってくれ！」

俺達がまさに互いの武器を交えようとした瞬間、第三者の声が入った。

俺は思わず、不機嫌に舌打ちをしてしまった。

そして、声の方を振り返る。

そこには予想どおり、仲間がいた。

とんだ邪魔が入ったもんだ。

「お前らには関係ねえ。邪魔すんな」

「俺らにだって関係あるさ。」

頭もケイルも、今の俺らにはいないと困るんだ。

もし二人がやり合おうってんなら、俺らは黙って見ているわけにはいかないんだ」

ああ、そうかい。

だが、悪いが今の俺にはお前らは邪魔以外の何者でもない。

ああ、なんだろう、この感覚は。

たまらなく愉快になってきた。

たまらなくて、笑いが止まらない。

久しぶりだ。この愉快的感覚は。

「……じゃあ……てめえらが俺らに殺られるか」

俺がよほど狂っているように見えたのか、奴らは一瞬怯んだ。

ああ、そうだな。

俺にこんな愉快的な思いをさせてくれたお前らには、ちゃんと礼をしないとな。

その言葉を受け、奴らははじめたように武器を構え直し、俺達を囲み始めた。

俺の背後からも、一度構えた武器をもう一度構え直す音が聞こえた。

俺の背後に立てるヤツなんか一人だけだ。

なんだ、お前も殺る気満々だったのか。

俺達はひるんでいるその隙を逃さず、仲間だった奴らに切りこんでいった。

RAN

2005/12/10

静かになったと感じた時には、立ってるのは俺とケイルの二人だけだった。

と気づいた途端、ケイルはその場にひざまずいた。

俺も、久しぶりに派手に動いたから、さすがに息があがっている。しばらくはそこから動けなかった。

まだ先程の興奮が抜け切らず、剣を放すことができない。

久しぶりだ、こんな感覚は。こんな愉快的感覚は。

やはり、これが俺の本性なのか。

今まで行動を共にしていた仲間に、情のかけらもなかったわけじゃない。

だが俺にとって、仲間よりミリアムの方が大事だった、それだけのことだ。

団体への責任は、俺の目的を果たすためには邪魔だ。

いずれ、なるべくしてなることだったから、ちよūdよかった。

ふとミリアムのが気になる、彼女の方に目を向ける。

ミリアムは　遠くを見るような目でこちらを見ていた。

こんなところまであいつに似てるのか。

俺が誰かを傷つけているのを見ると、ミリアムもまるで幻を見ているような目で俺を見ていた。

そのくせ、俺が見せないようにしようとするど嫌がったり、激しく怒ったりした。

その時ばかりは、彼女が何を考えているのかわからなくなり、正直怖かった。

だから、俺はあの目を恐れている。
俺達のつながりが切れてしまうのではないかと感じるから。

「ミリアム」

俺はたまらず、ミリアムに声をかけた。

ミリアムは体を大きく震わせ、俺を見上げた。

その目は、明らかに俺を恐れている目だった。

やはり、お前も俺を恐れるのか。

そう思うと、急にミリアムの顔を見るのが辛くなり、俺は思わず視線をそらしてしまった。

「近いうちにここを発つ。覚悟しておけ」

それだけを言うのが精一杯で、俺は彼女に背をそむけた。

だから、彼女がどういう反応をしたのかは見えない。

そして、まだ座り込んでいるケイルに声をかけた。

「なんだ、まだへばってんのか。情けねえな。聞こえただろ。なる

べく早くここを出るから、支度するぞ」

ケイルは、何を言ってるんだこの馬鹿野郎は、というような目で俺を見た。

まったく、目でものを言うことにかけては天下一品だよ、お前は。

「どこに行こうって言うんです。こんなにしっちゃって」

お前も、『こんなに』した一人だろうが。

と言ってもしょうがないことはわかってるから言わないが。

「久しぶりに、カリスの花を見たくはないか」

予想どおり、俺の言葉を聞いてケイルの顔は強ばった。

得たりと、俺は思わず笑みが出た。

「何考えてるんですか。国に帰ったらどうなることか」

「まあそこら辺はうまくやるさ。何も国を攻めようってんじゃない。今までどおりコソコソしてりゃいいんだ」

「……なぜ、急にそんなことを言いだすんですか」

一度言い出したなら聞かない俺の性格を知っているからか、ケイルは静かに話を聞く態度になった。

しょうがないヤツだと思ってあきらめたのだろう。

「お前もだんだんわかってきたな」

俺は少し嬉しくなって、ケイルに近寄る。

こいつは俺をよくわかってる。嫌というほど。

「いい加減、この状態をどうにかしたいと思ってるな」

「やっとその気になってくれましたか」

ケイルは深々とため息を吐いた。

「ああ。随分待たせちゃったが、やっと決心がついた。いいきつかけだったよ」

「いつ発ちますか」

一旦決めるとケイルは話を早く進めようとする。

あまりごちゃごちゃしたことは俺も嫌いだから助かる。

「準備ができ次第だ。長い旅になるから、しっかりしていかないと」
な

俺の言葉の端に別の意味を感じ取ったのか、ケイルも口を持ち上げて笑んだ。

「という訳で、だ。食料の準備がいるな」

俺は話題を変えるのに姿勢を正した。

ケイルは不審そうな顔をする。

「奪ってきたものなら、まだありますが」

「いや、できればあの食料はあまり持っていきたくない。物によってはどこから来たのかバレルからだ。ただ使えそうなのは持ってい

くが。あまり量も持てないから、どちらにしる選定はしないといけない。あと、思っていたんだがどうしても蛋白質のものが足りない。俺がそこまで言っつて、ケイルは何かに気づいたように目を見開いた。

「僕は嫌ですよ。やりませんよ」

「まだ何も言っつてねえじゃねえか」

「言わなくてもわかりますよ。あいつらの肉を削げつて言うんでしょ？」

ケイルは汚いものでも見るかのように、心底嫌そうな顔をした。それは間違いなく俺に対して向けられているが、この際気にしてられない。

「……まあ、そうなんだが……だがな、3人しかいないんだから全員でやらなきゃいつここを出発できるかわかんねえんだぞ」

言われてケイルは口を閉じた。

当たり前だ。俺は間違っつたことは言っつちゃいない。

実際、元仲間だつた大喰らいのために、肉などの減りがやたらに早かつたのだ。

だいたい肉は砂漠では貴重だ。生のものを運ぶのは非常に難しいからだ。

だから、肉と言っつてもそのほとんどが干し肉であるが、それも匂いがきつくなると、余計なものをおびき寄せ、非常に運びづらかつた肉のもととなる家畜を奪うのは、奇襲攻撃では無理があつた。

力自慢のヤツらが揃っつていても、牛や羊一頭を持ち上げるのはかなり厳しい。

だから今決定的に、体を構成するのに必要な蛋白質のものが足りない。

緊急時なら、乗り物の動物を殺すということもするが、それは本当に非常時だ。

乗り物をなくすことは、目的地が遠ければ遠いほど、死の危険に近づきやすくなる。

そんな危険を冒さずとも、今手近にあるものがある。

俺だつて正直、臭いし筋は多いしで、決してうまいとは言えないものを食いたいわけじゃない。

が、この場合しようがない、というものだ。

とりあえず俺は気をとりなおして、自分のナイフを手に取り、立ち上がる。

「こついつ時のためにお前にさばき方を教えたんじゃないか。さあ、さばいたら漬けなきゃいけねんだから、とつととやるぞ」

俺は立ち上がり、手近なナイフを手にして、そこらに転がっている元仲間、今はただの肉の塊を一つにまとめる。

やり始めればケイルの性格からして、渋々ながらやるのだ。

ケイルが立ち上がる気配がした。やっぱり俺の思ったとおり。

だが、ケイルが近づいてくる気配がしない。

俺はケイルの方を振り返った。

俺は一瞬その場に固まってしまった。

ケイルがミアムの方に歩いていたらだ。

そして自分のナイフで彼女のロープを切り、解放した。

「ケイル！ 何やってんだ！」

俺は思わず怒鳴ってしまった。

ミアムは大きく体を震わしたが、ケイルは涼しい顔して俺の顔を見る。

俺に喧嘩売ってんのか、こいつは。

色々なうまくいかず、俺は正直イライラしていた。

「人手が足りないんでしょう？ なら彼女にも手伝ってもらわない

と」

「ミリアムにんなことできる訳ねえだろ」

「なら覚えてもらえばいい。できないんじゃないかと、やらせたくないんでしょ？」

「!?!」

俺はその言葉に何も言えなくなった。

さっきのお返しってわけか。

「あーあーそうだな！ お前の言うとおりにさ！ 好きにやりゃいい！ 俺は知らねえからな！ ミリアムになんかあつたらただじゃおかねえぞ！」

俺は悔しまぎれにそう言い、ケイルらに背を向けて、また塊を集めた。

だが、俺の耳は嫌でもあいつらの声を拾った。

「という訳です。悪いけど一緒にやってください。やり方は教えませんから。僕も嫌なのは一緒です。それじゃあ、これを」

恐らくケイルが自分のナイフを渡したのだろう。

あいつの武器はナイフだから、何本かをいつも懐に入れているのだ。

料理もあいつの仕事だったから、様々なナイフを持っている。

「おら！ さばくぞ！ やんなら早く来い！」

俺は半ば自棄になって声を張り上げた。

「はいはい。さあ、来てください」

ケイルはミリアムの手を取り、立たせた。

ミリアムも素直に従っている。

なんだか様になってるのが気に入らなかった。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
6
/
3
/
3
0
*
*
*

Rain for you (番外編)

俺は雨が好きだ。

だって、君がこの雨を降らしているから。

子供の頃に聞いた昔話。

天国の人達が流した涙が雨になるという。

俺は信じてる。これも、君が俺のために流してくれてる涙なんだと。

だから、今俺をうつ雨は、こんなにも温かいんだ。

未だに、君に俺はあの言葉を言えば、天の国で涙を流さないでいられたんじゃないかと思ってる。

お前がほしい

そう言っていたら、俺は君を永遠に俺のものにできたんだろうか。言ってよかったのか？ 「お前がほしい」と。

だけど、結局俺は言えなかったから、ただ天を仰いでることしかできない。

どれだけ言いたかったことが。言えば楽になれたかもしれないとどれだけ思ったことが。

でも、俺にそれはできなかった。君のためだと思ったから。

君は全ての人を幸せにする人なんだ。

俺だけが独り占めしてはいけないんだ。

俺がそう言うと、君は少し悲しげな顔をしたことも覚えてる。

君は、俺が君を欲することを望んでいたのかもしれない。今なら

そう思う。

でも、あの時はわからなかった。
もしかしたら、俺はそれを罪と感じ、無意識のうちに考えないよう
うにしていたのかもしれない。

でも、今君は空からこの世界を見てくれている。
君の流す涙を受けるこの時が、俺の幸せ。

ただそれだけでいい。きっと君は不幸じゃない。
この涙がその証明。

結局、俺はこの世界で何の力ももたない。

この世界で無様に這いつくばって生きている。

悔しかったり情けなくなったりするけど、でもだから君は、俺の
ためだけじゃなくて、世界のために今涙を流してる。

同じように生きているのは俺だけじゃないから。

みんな、それぞれ色々なものを背負って、泥まみれになって生き
てる。

考え出したら止まらない。

俺があの時、君を欲すれば、君はただ俺だけのために温かい雨じ
やなくて、本当の涙を流してくれたんじゃないだろうか。

でも、だからって俺は今を後悔していない。

君はもう俺が見上げるこの空から、俺達を見守ってくれてるんだ
から。

君は優しく、また温かい雨を降らせてくれる。

それは俺達を癒してくれる。

その雨があるから、俺達は生きていける。

その雨は、優しい涙だ。

BGM by Eric Clapton "Tears in
heaven"
RAN **2005/11/24**

ケイルはミリアムを連れ、転がる肉塊の側に行ったようだ。事務的に作業を進めるかすかな音が聞こえる。 事

ミリアムに説明する静かな声も時折聞こえた。

ミリアムがおとなしいので、少し心配になった。

ジールがそつと後ろを振り向こうとした、その時。

「やめて！ お願い、やめてよ！！ そんなことできるわけがないじゃない。そんな……そんなひどい真似！ この悪魔！！ 屍食鬼！！ あんたたちは人間じゃな……」

ぱん。

いったか。

俺は恐る恐る後ろを振り向いた。

二人の妙な間で、気まずさがさらに増す。

「手伝えないのならそれでもいい。しかし、それなら少しおとなしくしてもらえますか。……今度は、手加減しません」

ミリアムはショックのためか、座り込み、呆然とした表情だった。

「ケイル、彼女を手荒に扱うんじゃない。どだい、刺激が強すぎるんだ」

聞かないだろうとは思ったが、俺は一応そう言った。

すると、ミリアムもこちらを見た。

だが、視線を下に移して、俺の腕を見ると、途端に目を逸らした。

俺は何かと思い、自分の腕を見ると、赤く染まった手が見えた。なるほど、これのせいだ。

俺はさりげなく、手をミリアムから見えないように隠した。

するとケイルは明らかに嘲りを含んだ笑みになった。

「ええ、わかっていますよ。このひとは、あなたの『大切な』ひとですものね」

全く、お前は本当に皮肉を言うのが大好きらしいな。

「はっ、好きに言えばいいさ」

俺はあえて言い返さず、また作業に戻った。

言い争ったところで、不毛なだけだ。

そこで、俺達の会話は切れ、ただ黙々と作業を続けた。

別に俺だつてこの作業が平気なわけじゃない。

だから、今この時、俺はあまり考えないようにしていた。

あまり見ないようにしていた。

見てしまつては、こんなことはやれない。

音さえも意識から遮断して、俺は作業を続けた。

そして月も沈み、音も消え去る真夜中になった頃、作業は終わった。

空気が変わった時、俺はふと我に戻った。

辺りを見回すと、ケイルと目が合った。

お互いに、作業が終了したようだ。

「見る。二人でだつて作業が終わった。かえって慣れないヤツを使うより効率がいい」

俺はやや得意になつてケイルに言った。

だが、ヤツは涼しい顔をして、処理した肉をまとめていた。

「朝までにこれを取りあえず漬け終えてから、そういうことを言うてください」

一回でいいから、こいつを言い負かしてみたい。

俺の笑顔は一気に冷えていった。夜の砂漠のように。

そして、また俺達は黙々と作業を続けた。

やけに外の風の音が響いている気がした。

そして空が白くなり始める頃には作業が終わっていた。
荷物を積み、いつのまにか眠っていたミリアムもラクダの上に乗
せた。

起こさないように静かに乗せたつもりだったが、やはり気づいて
起きてしまった。

「起きたか。何か食べれそうか？」

俺は、起き上がったミリアムに、山羊の肉と水を差し出した。

ミリアムは、水だけをゆっくりと手に取り、少し口にすると、俺
に返してきた。

その間に、何も言葉はない。

俺はしばらく肉を差し出したままでいたが、ミリアムは全く動く
気配がなかったので、あきらめて肉を袋に戻した。

やはり、動物の肉であるうと、あんなことがあった後で肉を食べ、
という方が無理か。

「何か食べられそうだったらいつでも言うといい。その……おまえ
が食べられそうなものも、少し携帯するから」

とりあえず、声だけはかけておこうと思って言ってみた。

しかし、ミリアムは俺に目を合わせようとはせず、相変わらず黙
ったままだ。

何となく、自分で言って、何を言ってるんだと恥ずかしくなり、
自分のラクダに乗った。

何やら背中に、恐らくケイルと思われる視線を感じるが、俺はあ
えて気にしないことにした。

そして、片手をあげて、出発の合図を出した。

しばらく歩いていると、太陽も昇り、砂漠らしい焼けるような暑
さになってきた。

俺はふと気になり、ラクダを止めた。

そして、近くにあった荷物の袋からマントを取り出す。少し匂ったが、これしかないので仕様がな。

俺は、それをミリアムに羽織らせた。

ミリアムは少し驚いた顔をして俺を見ていた。

「陽射しが強くなってきたからな。あんまり上等のマントじゃねえけど、無いよりましだろ」

ミリアムが受け取ったのを確認すると、俺はラクダに戻ろうとした。

「……ねえ」

だが、予想に反して、ミリアムの声が聞こえてきた。

「ん？」

俺は飛び上がりたいほどの気持ちを抑えながら、ゆっくりと振り向いて答えた。

「あたしは、これからどうなるの？ 国都で売られるの？」

ミリアムが、厳しい、でも不安をのぞかせた眼差しで聞いてきた。こいつも、気強く見せかけて、やはり弱い面はあるのだろう。

「まさか」

と、ミリアムの後ろから声が出た。

ミリアムは驚いて振り向き、後方のケイルを見た。

ケイルは、俺以外にはするようになにこやかな笑顔でミリアムに笑いかけていた。

何となく、気に入らない。

俺は、複雑な思いを吐き出すために、かすかにため息をついた。

悟られないようにしたつもりだが、ケイルは途端に俺に目を向けた。

笑顔だったが、冷めたものに変わっていた。

「ジールがあなたを手放すはずがない。ねえ、そうでしょう」

「引っ掛かる言い方だな。じゃあ何だ？ おまえはミリアムをどこぞに売っ払っちまったほうがいいとでも言うのかよ。違っただろうが」

俺はケイルの言い方が気に入らず、思わずつつかかる言い方をしました。

ヤツはこういう反応こそを喜ぶのに。

そう気づいて、さらに俺は悔しくて顔を歪めた。

「熱くならないでくださいよ。まあ僕は、僕が損害をこうむることさえなければあなたが何をしようとか構いませんがね。ただ」

ケイルはここで間を置き、その目を僅かに細める。

挑発的な態度だった。

「この娘さんがあなたの言う『それ』だとして、それを承知で、僕の姉と同じ目に遭わそうというのなら、それ以降僕があんたに従っているという保障はありませんよ」

いつも以上に、口調は冷えていた。

氷なんてものじゃない。

さらに刃の鋭さも持ち合わせた声音だった。

「ちっ、いつの間にか偉そうな口きくようになりやがってよ」

俺は悔し紛れに言った。

ケイルは、ミリアアの弟だけあって、妙に俺の心の隙間に入ってくる気がする。

思わず、その気持ちが出てしまったのか、乗ったラクダが不機嫌そうに鼻を鳴らした。

俺は、悪い悪い、と謝るように、軽くラクダの頭を叩いて、ラクダを落ち着けた。

そして、再びラクダは出発した。

道中も、ケイルはミリアムに話しかけていた。

やはり姉に似ている少女のことは気になるようだ。

前はあるなに散々なことをしていたのに、ヤツの心境はやはりわからない。

そんなに距離は離れていないので、かすかだが二人の会話は聞こえていた。

「……それにしても、本当によく似ている。昔の姉さんを見ているようですよ」

「ねえ、昨夜から言っているそれ、どういうことなの？ あたしがあなたのお姉さんに似ているから何だって言うの？」

「あなたが『生まれ変わり』を信じないなら、奇妙な話にしか聞こえないでしょうね。……もちろん僕も、全面的に信じているわけじゃない。ただ、あなたが本当に姉 ミリアという名でした。名前までどことなくあなたのと似ていますね。の生まれ変わりで、姉と同じ魂を持っているのなら、そして僕にそれが確信できさえしたなら、きつとそれはとても、喜ぶべきことなのでしょう。死んだ人間 完全に消えてしまったはずの人間の魂、それと同じものがそこにあるということですからね」

「その……お姉さんは亡くなってる？」

「あたしがさらわれたのは、あたしがあなたのお姉さんの生まれ変わりで、わりだつたからなの？」

「ジールはそう言っています。彼には『わかる』のだと。恋仲だった女の まるで二人はもともと一つでもあったかのように激しく焦がれた女の魂に、自分の魂がどうしても引かれるのだと」

「そんなこと」

二人の会話はどんどん進んでいく。

そろそろまずいな、と俺は思っていた。

自分のことを、あまり他人に暴かれるのも、気分がいいものではなかった。

「ケイル、喋りすぎるな。私事だ」

俺は、前を向いたまま、ケイルを制した。

二人の口はすぐに閉ざされた。

いつもは俺のことをなめた態度でいるケイルだが、こういう時は素直に言うことを聞く。

ヤツなりに何かを感じているのか。

まあ、俺としては都合がいいから、特に気にしてはいないが。

ミリアムもあきらめたようで、それ以降、二人の会話はなかった。

そして、俺達はさらに目的地へと向かっていった。

しばらく歩くと、人の集落らしい影が見えてきた。

俺の記憶が確かなら、もうすぐオアシスがあるはずだ。

だが、少し様子が違っていて、俺は思わずラクダを止めてしまった。

後ろの二人も、俺がなぜ止まったのか察したのか、何も言わない。

「何だ、あれ」

俺は無意識にそう呟いていた。

「雲、みたいですよ」

ケイルが俺の呟きに答えたようだ。

「んなこたあ、わかってんだよ。何であんなどす黒くてでかい雲があんだよ」

俺とケイルは、目の前の集落の上にある雲に目を向けたまま会話を
をする。

「きつと雨季なんですよ」

「そんなにまだ歩いてないぞ。まだここら辺の雨季は遠いはずだ。

つてか、あそこだけ雨が降ってるなんて不自然すぎる」

「……………」

ついにケイルも言い返すネタが尽きたようだ。

会話が途切れた。

だが、そこで動かないわけにもいかないの
で、町へ向かうことにした。

町に着くと、やはり遠くから見えたように、空は暗く、雨が降っていた。

俺達は、さすがにラクダから降り、まずは宿屋を探すために、町を歩いていった。

何はともあれ、雨がひどかった
ので、建物の中に入りたかったのだ。

本当は足がつくので、宿屋に泊まるのは避けたかったが、ミリアムもいるこの状態で、雨の野宿は無理だろうと考えた。

宿屋を数件回り、一番安く、対応もそんなに悪くなかった宿屋に決めた。

そして、そこにラクダを預けて、俺達は宿屋を出た。

面倒ごとに関わるつもりはないが、何となくこの町の様子が気になったのだ。

ケイルもミリアムも、文句を言わずについてきたから、恐らく俺と同じように気になっているの
だろう。

そして、どうも何か匂う気がしたのだ。

雨の勢いは先ほどよりも落ち着いたが、変わらず小雨が降り続いていた。

こういう雨が一番困る。

大して水もたまらないくせに、服は湿らせてきて不快になる。

とりあえず、俺達はそれぞれ外套を羽織って、外を歩く。

砂漠の中にあるオアシスだけあって、人で賑わっていた。

宿屋を出るとすぐに市場があり、色鮮やかな食べ物も並んでいた。

だが、食料はまだあるから、ここで補充する気はなかった。

補充できるところで補充すべきだろうが、腐らせるのもまたうまい話じゃない。

とりあえず、俺達は市場を通り抜けた。

すると、開けた場所に出た。

どうやらこのオアシスの広場らしい。

歩いてみてわかったが、結構大きな町として栄えているようだ。

オアシスは砂漠を旅する多くの人が来るが、だいたいはただの継地点として終わることが多い。

だがたまに、そこを貿易の拠点とされることもあり、そこから大都市になることもある。

それは、安定した雨季によるものであるのだが。

しかし、町を歩きながら、人々の話を聞くと、やはりこの雨の降り方は異常らしい。

雨季はまだ先であるはずなのに。

そうして、会話を盗み聞きしていると、同じ内容の話を何回か聞いた。

この地域には、天に純粹な女、つまり若い処女を天に捧げて、雨季を安定させるよう神に祈る、という儀式が伝統的にあるらしい。

先日、その儀式を行ってから雨がずっと降り続けているという。

「ジールさん」

俺が町人の話を盗み聞きながら歩いていると、ケイルが声をかけた。

「何だ」

俺は道の脇へ避けて、ケイルの方へ振り返る。

「何か余計なことは考えてないですよね？」

ケイルは明らかに疑わしげな目で俺を見ていた。

俺は、構わず笑みを浮かべた。

「何か、気になる話だと思わないか？」

「冗談じゃないですよ！」

ケイルは思わず大声をあげる。

と、すぐに周りを気にして、自分で口を押さえて、また小声で話し出した。

「僕らはこれから国都へ向かうんです。寄り道なんてしてられません。だいいち、あまり派手な行動をして素性がバレてしまつたら……」

「あー、もう別にバレてどうなる素性でもねえし、大丈夫だろ。こんなおもしろそうなこと放っておけねえよ。人生楽しく生きねえとな」

俺はケイルの言葉を途中で遮り、また前へ進み始めた。

「……つたく、しょうがないな……」

ケイルは軽く舌打ちしながらも、俺の後ろをついてきた。

ミリアムが静かなので心配になり、後ろを見たが、彼女もちゃんとついてきていた。

まあ、ケイルと俺の間にはさんで歩いているのだから、大丈夫だろうとは思つが。

そして、俺達はまた町を懲りずに歩き回った。

一通り、広い町を歩き回り、だいたい町全体を把握すると、もう日は沈みかけていた。

あまり見知らぬ土地で、初日から夜中に歩くのは賢いとは言え

ない。

俺達は、宿屋に戻ることにした。

そして、部屋を取っていた宿屋の扉を開けた。

「ふざけるな！」

扉を開けると同時に、怒声が聞こえてきた。

ミリアムが驚いて、後ろへ下がる気配がした。

ケイルがミリアムの肩を押さえ、落ち着けようとする。

ケイルのいちいちミリアムにする動作は気になるが、今はそれよりも、怒声の原因の方が気になった。

宿屋のロビーの向こうはすぐ酒場になっていて、この宿屋の性格をうかがわせる。

少し迷ってはいたのだが、やはりこういうこともあるか。

しかし、路銀が少ないものとしては、贅沢は言っていられない。

それに、こういう方が何だかおもしろそうだ。

「ジール」

そう考えているのが顔に出たのか、ケイルが後ろから呆れたように声をかけた。

「あ、出てたか？」

俺は大して悪びれもせず言う。

事実、楽しい気分なのは間違いなかった。

「あまり、そういう顔をして見ていると、からまれますからやめてください」

「いやあ、どうしても顔に出ちまうんだよな」

「とにかく、面倒ごとにこれ以上関わるのはごめんです。今日はさっさと寝てしましましょう」

ケイルがそう言って、俺の背中を押して部屋に向かわせようとする。

が、俺は、ケイルのその手を止めて言った。

「まあまあ。ここまで来たからには、色々見ていかないとな」

俺は機嫌よく酒場の方に向かって行った。

すると、驚いたことにミリアムも俺の後ろをついてきた。

ケイルは、またもしょうがないな、というように盛大にため息をつくと、後ろからついてきた。

そして、酒場の方に行って、とりあえず入り口から騒ぎのある方を覗いた。

だが俺は、酒場の騒いでるらしき人物を見て、その場に固まってしまうた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2318t/>

砂国

2011年8月7日03時13分発行